小学校でのいじめとその取り組み

附属三原小学校副校長　浦島　啓

広大フォーラム前号（七月三日発行）で「いじめを考える」という特集が組まれている。そこには、学校だけでなく社会や家庭の問題として捉え、その解決策を考えている。

ここでは、小学校という立場で「いじめ問題」にどのように対応しているか実情を紹介します。

一．いじめの実態をどうつかんでいくか

「集団で一個人を、集中していやな思いに陥らせる」といういじめの現象は、高学年になるほど表面には出て来にくいものです。

しかし、教師は日頃から児童を観察することで、児童の変化をつかんだり（この力は、児童との交流で培われるものであり、教職経験が大きな要因となる）、児童間の人間関係情報をキャッチしたりしていじめの実態をつかんでいきます。

いじめの実態には定式はないが、次のような状況で起こることがしばしば見られます。

○異質性から

児童には、家庭で育まれた価値が彼の絶対的な価値です。そのため、自身と異なる価値に対してたいへんな不安を抱くものです。

異質なものに遭遇するとき、新しい価値判断が要求されます。どうしていいかわからないときに、異質性に攻撃を加えます。しかも、個人としてだけでなく他者の同調を求め、しつこく攻撃を繰り返すのです。

○児童同士の人間関係構築過程から

児童は自身を認めてくれる友だちを作ることは言うまでもありません。しかし、三人が同時に対等な人間関係をつくることは、彼らにとっては非常に難しいことです。そこで、二人だけの人間関係を成立させるため、もう一人を誹謗中傷するという誤った人間関係の構築をするのです。

この時、児童の行動には、もう一人の所有物を隠すとか、欠点や弱みを第三者に言いふらすとか、多様な攻撃が見られます。この時第三者が言いふらした側に組みする場合、当人はいじめられる状況になります。

○仲間としての連帯感から

児童は、彼らの価値基準によって特定な集団を作りやすいのです。

だが、この基準が社会規範から外れることもあります。社会規範との整合を図って、自身の集団を抑止しようとするとき、本人は集団から外されます。

○保護者の人間関係から

児童は、その背中に家庭そのものを背負ってくると言われています。特に、低学年においては、児童のしゃべり方、他者に対する会話の仕方、しかり方、自身の持つ価値規範など、両親の保持しているものや様子をそっくり真似ていることにしばしば驚かされます。

学校という場で必然的に交流しなければならない親が、感情のもつれや誤解を持つとき、それが児童に鏡のごとく映し出されることがあります。その結果が、一児童を攻撃し仲間から外していく行動を起こすのです。

いくつかの具体的な例を述べたのですが、教師が学級でいじめと判断される現象を観察した時、児童の人間関係に起因するのか、学級全体の人間関係にあるのか、家庭の問題が関係するのかなど、関係性を分析し原因を探ることを行いつつ、実態をつかんでいきます。

二．いじめ解決への取り組み

実態が把握されると、その原因の解決にあたっていきます。

解決のために、各学校でさまざまな取り組みがなされていることはいうまでもありませんが、本校では、児童の人間関係から起こっていると捉えた場合、児童指導（道徳の時間などを使う）で価値観の変容を迫る取り組みを行います。

さらに家庭の場合は、子どもの実状を客観的に捉えるように、教師と保護者が納得いくまで話し合いを進めます。

カウンセリング、道徳の授業、保護者との連携、関係機関との連携、地域との連携など、児童にとっての阻害条件に一つひとつ地道に取り組んでいきます。

もちろん、日々児童の学級指導で、お互いがいやな思いをしていることをみんなの問題として考えあわせ、いじめに対する予防を行うと同時に、問題そのものが受け入れられる学級集団を構築するための実践研究が積み上げられていることは、言うまでもありません。

「児童は家庭や社会生活をランドセルに背負って登校する」と言われていることからして、家庭・社会としっかりと連携を保ち、「いじめ」の解決にスクラムを組んでいきたいものです。

（うらしま・あきら）

中学校で深刻化するいじめ

附属三原中学校副校長　松田正文

一．社会問題としてのいじめ

いじめの問題が社会問題として大きくクローズアップされたのは、昭和五十八（一九八三）年以後で、校内暴力がマスコミによって取り上げられ、大きな社会問題として報道され、大人の圧力によって鎮静化し始めた頃、校内においては陰湿ないじめが始まっていた。以後今日に至るまで、このいじめの問題は、学校の中で続いています。

陰に隠れて行われるいじめは、その加害者も被害者も、目立たない子どもの場合が多く、集団での無視やいやがらせなど、外からは何が起こっているのか見えないまま、被害者に精神的プレッシャーをかける傾向にあります。

そして、その実態がわかった時には、被害者は精神的に大きなダメージを受け、立ち直れないようなところまで追い込まれていることが多く、一方で、加害者の側は、集団での

行動により責任の所在が不明確なために、自分でいじめを行っているという意識もなく、大問題になった時でも、自分が何をしているのかわからないような傾向にあります。

二、中学生のいじめの特徴

いじめは、たかだか子どものイタズラやふざけにすぎないという見方が、いまだに根強く残っています。

こうした見方からすれば、いじめは子どもが成長し、分別がつくにつれておさまっていく現象であるかのように思えます。実際、ある調査によれば、中学生のいじめの経験率は、小学校に比べて少なくなっています。

しかし、決して中学校でいじめが鎮静化しているとは言えず、むしろ、中学生のいじめの形態上の特徴として現れています。

その一つは、中学生では、いじめられっ子が特定の子どもに固定化する傾向にあることです。中学校ではいじめられっ子の数は著しく減少し、また、いじめた子といじめられた子とを同時に経験している子ども「被害・加害者」も減少しています。

一般に、いじめの段階や、いじめが遊びやふざけの中で行われている場合、「被害・加害者」の立場の入れ替わりが多くみられます。中学校で「被害・加害者」が減少しているのは、中学生のいじめが特定の子どもにしぼられ、典型的ないじめられっ子ターゲットとして固定化され、より発展した段階のいじめを多く含んでいることを語っています。

なお、いじめを周りで囃したてておもしろがっている子ども（観衆）を加えると、中学生ではいじめ集団の規模は大きく膨れ上がり、集団いじめの様相を示してきます。

次に、子どものいじめに対する認知の仕方の変化です。いじめはその動機を露骨に示した形より、むしろ遊びやふざけの形をとることが多くなります。小学生ではいじめとして認知されていた遊びも、中学生になると遊びやふざけとして捉える傾向にあり、この認知の変化は、小さないじめへの慣れであるとともに、規範や逸脱に対する見方や状況に応じて柔軟に対応する能力の発達にも起因します。

以上のように、中学生になると、特定の子どもにいじめが固定化し集中する傾向にあり、それが長期にわたることが多く、かつ集団いじめの形態をとる傾向が強くなります。

したがって、いじめ経験の減少は、主として加害・被害の立場の入れ替わりの減少や認知の変化によるものだが、いじめられた経験の減少はいじめの鎮静化を示すものではなく、むしろ陰湿化し、深刻な様相を呈している現れでもあります。

三、心の居場所としての学級づくり

いじめに対して「おもしろがって見ている」「知らないふりをしている」という観衆や傍観者的立場の子どもも意外に多くいます。そこで、「いじめは絶対に許さない」といういじめに対しての徹底した否定意識や、「いじめはやめろ」といえる仲間意識を子どもに持たせるような学級づくりが、いじめを予防することになります。そのためには、

○子ども同士が、お互いに相手の立場や気持ちを考え、助け合い、支え合っていく人間関係を学級の中に育てる。

○学級集団の中で観察、傍観者的立場にいる多くの子どもの意識を変え、いじめたり、いじめられたりすることは、「どんな理由があるにせよ、絶対許さない」といった正義と勇気を尊び励ましていく。

○事例や作文、日記などをもとに、被害者の心の痛みや苦しみを理解させ、勇気を持って正しい行動や人を思いやる心を育てる指導を工夫する。

○一人ひとりの子どもの個性が生かされるよう、子どもの主体的な参加方法を工夫し、協力して成し遂げる喜びを感得させる指導を工夫する。

（まつだ・まさふみ）

「いじめ」の心理臨床

教育学部
臨床・障害心理学講座
一丸　藤太郎

一、「いじめっ子」のいじめ意識の希薄さ

「いじめ」についての調査報告、あるいは新聞やマスコミの報道などから注目されることの一つに、「いじめっ子」が自分のいじめが「どれほどひどく相手を傷つけていたか解らなかった」とか、「面白かったから」と答えるということが挙げられる。また、彼らは「反省していない」と非難されることも多い。

「いじめっ子」が、いじめた理由を尋ねられ、このように答えたり、反省していないように思われるのは、どのように理解されるのだろうか。心理臨床の経験から解ることは、いじめっ子のこうした答えは、言い訳でも言い逃れでもないということである。

「面白かったから」と言った子は、その時その場で、その子にできるだけの正直さと誠実さで答えたに違いない。

高い知的能力を持ち、優れた学業成績をあげているにもかかわらず、自分の言動が相手をどのような気持ちにさせるのか、自分の行為がどのような結果を生じさせるのかといったことが、どうしても理解できない思春期の子どもたちのことが気になりだしたのは、二十年程前からであった。最初はひどく驚いてしまったが、このような子どもは今ではもっと多くなってきている。いじめっ子が「面白かったから」と答えるのには、このように相手の立場になって考えるという力が育っていないことを示しているように思われる。

「いじめ」では、しばしばいじめっ子は加害者、いじめられっ子は被害者として結論づけられてしまいやすい。しかし、いじめっ子にそのような能力が育っていないとしたら、彼らには「いじめている」という意識が希薄なのであり、反省のしようがないことになる。こうした子どもたちに、相手の立場に立って考えるということを真に体得させることは、心理臨床でも大変なエネルギーと時間が必要である。

二、「いじめられっ子」の秘密主義

次に「いじめられっ子」では、彼らが教師や親へ援助を求めるよりも、むしろいじめられていることを秘密にしておこうとしたり、